

巡ってきた幸運

Wedge White

巡ってきた幸運

それは、妻が悠との生活を始める少し前のこと。

以前までいた家を離れ、新たな憑く先を探していた妻は、なんとなく街を歩き回っていた。

妻は“そうであることが自然なこと”として、人混みの中に紛れ込むことができる。そのため、ほとんどの人間に存在に気付かれることすらないし、仮に会話をしたとしても、ほんの一瞬间後にはその記憶も忘れ去ってしまう。

それは少しだけ寂しいが……でも、それが座敷童というものなのだから、と受け入れていた。
「うわあ……!!」

入った先のビルの一階。薬局で若い店員がいくつもの段ボール箱を抱えて歩いていた。そして、鈍臭いことにバランスを崩し、一番上の箱が滑り落ちてしまいそうになっている。

「……仕方がないのう」

妻は店員に駆け寄ると、軽く飛び跳ねて、滑ってしまいそうになっていた箱を押してやった。
「あ、あれ？」

すると、すぐに彼自身でバランスを立て直して、滞りなく運んでいく。

店員は妾に気づくことはなく、少し不思議そうにはいたが、自分の力で立て直せたのだらう、と自分の仕事を続けていた。

特定の家に憑いていない時の妾は、こうやって人並みの行動で小さな幸せを与えることしかできない。

それでも、たとえば気付かれなくとも。妾がいることで人の生活が少しでも上手いくのなら、それでいい。

ただ、この状態の妾ではできないこともある。たとえば……。

チャリーン！

小銭が落ちた音が響く。響くといっても、たった数枚の小さな硬貨が落ちた程度の音だから、近くにいる人間にしか届いてはいないだろう。

薬局の会計を終えた老婆が、財布に小銭をしまい損ねて落としたのだろう。老婆は目か耳が悪いか、それに気付くこともなく店を出ていこうとしてしまう。

こんな時、相手が若者であれば妾が小銭を拾ってやり、再び目の前に転がしたりする。

ただ、自ら落とした小銭に気付かない老婆が相手では、それをやっても効果は薄いだろう。だからといって、直接相手に渡すというのは……少し違う。

どうせ妾は忘れられるだろうが、そこまではつきりと特定の相手に干渉するというのは、家に憑いていない状態ですることではない。

別に座敷童はかくあらねばならない、という取り決めがある訳ではない。しかし、それが妾がなんとなく持っている……矜持のようなものだった。

妾は人間が好きだ。どんな人間の役に立ちたいと思う。しかし、妾は人間ではない。人ではない者が人の世界に干渉し過ぎるのは違う……そう思う。

それに、老婆が落とした効果は小さな銀色のものが二枚に、茶色のものが一枚。合計でたった二円。

近年、老人のもらえる年金が減っているらしいことは、前の家にいた頃に知ったが、だからといってその二円が老婆の生活に直接的な影響を与えることはないだろう。このまま誰にも拾われずにいれば、いずれ店員が掃除するだろうし、その二円を積極的に求める者もないだろう。

ならば、と妾はそれを見過ごすことを決める。ただ、少しだけ悪いことをした気持ちになつて。――だが。

「あ、あの、落とされましたよ」

小さな男の声が聞こえた。振り返ると、今の学校制度で言う大学生ぐらいの男子が、老婆に声をかけているところだった。

とはいえ、全くの他人が相手に緊張しているのか、声はどもり、震え、小さい。耳が遠いであらう老婆には届かず、構わず行ってしまうようになる。

さて、この男子はどうするのだろうか？少し意地悪な気持ちで様子を見てみると、すぐに男子は床に膝を突き、散らばった小銭を拾い上げると、老婆に駆け寄っていた。

「お金、落とされましたよ！」

今度は大きめの声で言つたのに、それでも老婆には届かないらしい。

仕方なしに軽く肩に手を置き、振り返らせると、その手に小銭を握らせた。

「落とされましたよ」

「ああ、ありがとう」

「いえ……！」

そして、目的を果たすと逃げ出すように出ていった。

「……………面白い男子じゃ」

なんともシャイで。それでも真面目で。たった二円のためだけに、知らない相手に声をかけるのなんて苦手なのに、声を振り絞り。まるで悪いことをしたように去つてしまう。

その姿が可愛らしく、微笑ましく……そして、妾が幸せにできなかった人間を助けてしまったその姿が、少しだけ眩しくて。

妾は彼に興味を持ち、それからしばらく遠巻きに彼を見守ることにした。

すると、様々なことがわかった。

試験の日だから、と早めに家を出たはいいが、途中で通学に使っている自転車のチェーンが

外れ、それでもなんとか駅に着いたかと思えば、乗ろうと思っていた電車が後少しのところで行ってしまう。そして結局試験には遅れてしまった。

また別の日には、アルバイトをしていて。まだ不慣れながらもなんとか仕事をこなしている、面倒な客の対応をすることになり、精神的にボロボロになって、仕事でミスが増えてしまっていた。

違う日には、最近の若者がよくやっているソーシャルゲームというもので、今までずっと溜めていた“無料石”を全て使ったのに、目当てのものが手に入らなかった……と、これは割と誰でもよくあることかもしれない。

とにかく、その男子は何かと不幸で。しかし、自分が不幸なのに、変に他人にお人好しで。損な生き方をしているのう、と思わず顔が綻んでしまうことが何度もあった。

——だから。

「夕方には雨が降り出すと、朝の予報の時点で出ていたはずだがのう？」

ある雨の日。コンビニに入っていた男子を追いかけて、そう声をかけた。
今度はこの不幸な青年を、妾が幸せにしてやろう、と。

「という訳じゃ。情けは人の為ならず。あの時の二円が巡り巡って、妾という幸運を連れてきたんじやな。ふふつ、人に親切するものじやな？」

「まあ、な。でもまあ……ぶつちやけて言えば、桐に対して使ったお金を考えたらずごい額になってるけど」

「な、なんじやと!? 妾の可愛らしい姿を毎日見れるのじやから、食費や服の代金ぐらい安いものじやろう!!」

「ああ、そうだよ。……ありがとうな、桐」

「ふんつ、わかればよいのじや、わかれば。……妾こそ、そなたに出会えて本当によかった。

こんな共に過ごしていて楽しい人間は、あの女子以来じや」

これから妾は、悠と共に過ごしたいと思う。たとえそれが、妾に傷を残したとしても。

「人の子の一生は短いのじや。後悔はしないようにするんじやぞ? 妾も、決して後悔はしないようにしているのじや」

それが妾というものなのだから。

巡ってきた幸運

2019年12月 5日 初版

奥 付

著者 Wedge White
URL <https://wedgewhite-team.wixsite.com/home>
E-Mail konjyoyasuhiro@gmail.com

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
(<http://tokimi.sylphid.jp/>)